若人の爲に

武者小路實篤著

池田書店

昭和三十二年四月五日　印刷
昭和三十二年四月十日　発行

若人の為に

定価　二三〇円
地方売価　二四〇円

著者　武者小路實篤

発行者　池田敏子
藤沢市鵠沼二五〇一番地

印刷者　和田彰三
東京都板橋区志村町一ノ一

発行所　株式会社　池田書店
藤沢市鵠沼二五〇一番地
（東京都千代田区神田三崎町二ノ二四）
電話　九段（33）五九六三番
振替口座東京一六五四二五番

東洋印刷株式会社・印刷

序

池田書店が、僕の若い人達におくる言葉を集めて、本を出したいと言う。僕は今までに、そういう方面の本を出していて、大概言いたいことを言つたわけだが、しかしまだ言いたりないものを感じていたのも事実で承諾した。しかし、僕も何かと忙がしく、自分でかく事は厄介なので、僕の言う事を筆記してくれれば話してもいいということになり、それから毎週二度、高山菊敏君が来て、題を出してもらうことに就いて話をした。少したつて高山君が、速記の出来る千名　裕君と二人で見えることになつた。速記だとべらべら饒舌ればいいので、仕事ははかどつた。僕がべらべら饒舌るのを、その通り要領よくかいて来てくれる。殆ど手を入れずにすむので、大いに助かつ

た。その結果、この本が出来たわけだ。問答体の処は高山君の質問に僕が答えたわけだが、少し答えがずれている所もあるが、言つている事にまちがいはないと自分では思つているので、そのままにした。自分ではわりに気持のいい本になるだろうと思つて、本の出来るのをたのしみにしている。

若い人の一生に何かの意味で役に立つとうれしい。

昭和三十二年二月

武者小路実篤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

在りのままということ　I　3
在りのままということ　II　10
過去・現在・未来　17
死について　24
生き甲斐について　37
快楽について　52
神について　57
肉体と心　65
個人と社会　80
責任の限界について　91
美と善について　99
友情について　109
喜びについて　116

孤独について　124
尊敬する人々について　132
生き方と環境について　142
人体の美を活かす　147
精神の世界性について　152
精神の無限性について　157
——若者との対話——
自然の意志について　165
天罰というものについて　176
青年の出世主義　182
読書について　194
人間の不幸について　201
幸福感や没頭という心境について　208

若人の為に

在りのままということ　I

在りのままということは、一番簡単なことのように思えるが、実際は仲々自信のある人でないと実行できないことだ。また同時に、その人の心がけが正しくないとできないことで、在りのままにものごとを云ったり行なったりすることは、きわめて稀であるというのが事実であるように思われる。多くの人々がしていることをみていると、実際の自分よりえらくみせたがったり、かしこくみせたがったりしているように思われる場合が少なくない。

明鏡止水という言葉がある。これは、僕もよくは知らないけれども、禅宗の悟りの境地を示している言葉と思うが、それだけにこの境地に達するのは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

困難で、大ていの場合、止水ではなくして動乱のある水のような境地で、ものをみたり聞いたり判断したりする場合が多いのではないかと思う。

この世に生きていくには、いろいろの事実にぶつかることがあるのを覚悟しておかなければならない。ぶつかる度に心が動揺する間は、何事も在りのままにみることはできないし、また自分を在りのままに活かすこともできないわけである。大概の場合、僕たちは相手の出方によって自分の心を動かされるもので、売り言葉に買い言葉という言葉があるが、ついそうなりがちなものだ。自分が本当にそう思っていることを云う場合よりも、一時的の感情にのぼせてものをいう場合が少なくない。

たとえば、人に馬鹿といわれても平気でいられる人は実に少なく、多くの人は相手に馬鹿といわれれば、自分も相手を馬鹿ということになり、相手の心の動揺が自分の心に伝わり、さらに大きな動揺をうけ、相手にもっと大きな動揺を与えないではすまないような気持になるのが普通である。かくて世

の中は平和にならず、波乱は波乱を呼び、動揺は動揺を呼んで、停止するところを知らないということになりがちである。このことは、お互いに憎みあっている同志で行われるばかりでなく、お互いに愛しあっている筈の夫婦の間でも、友人の間でも起りかねない事実である。

僕は、これも人情の現われであるから、そうなるにもそうなるだけの理由があるのだと思う。人間が他人から軽蔑されても平気でいるということが事実だったら、その人は名誉心のなくなった人であり、自分の向上心も結果として失うことになる。人間は社会的動物であるといわれているだけに、人々から軽蔑されたり信用を失ったりして平気ではいられないようにつくられているのはよいことに思われる。その結果他人に軽蔑されると腹を立て、他人に尊敬されると嬉しくなる。つまり、腹を立てたときには、在りのままに腹を立て、喜こぶときには在りのままに喜こぶということは、決して悪いことではない。しかし、それがこだわりになって、在りのまま以上にはみ出て、

病的にまでなることはおそろしいので、感情のたかぶりが、いろいろの弊害をおこすのは、病的なところまで、感情がたかぶるからだといえると思う。

僕は、人間にいろいろの感情が与えられているのはよいことだと思い、それがなかったら人間ではないといえると思う。それを在りのままにみて、全部の調子をよくとることができればそれでよいのだと思うが、ある一つの感情が、病的にまで発達すると、他の感情がそれによって圧迫されて、それを活かすことができなくなってしまうのがよくないのだと思っている。たとえば腹を立てるのも、腹を立てる方がよい場合もあるが、それを立てすぎて後で後悔しなければならないようなことになると、その点だけが病的にのさばったとみられてよいと思う。それらの点を理想的に活かしていくのはなかなかむづかしいことだと思われるが、僕たちはすべてのことを在りのままにみ、理性でそれを判断して、正しい姿で活かすことが大事のように思われる。

話が幾分それたと思うので、本題に戻して違う方面から考えてみたい。

僕は、人間が如何に創られているかということを、まず第一に在りのままにみて、その意味を知り、それを正しく活かしたいと思っている。多くの人は、事実を在りのままにみることに満足しないで、一部を誇張してみる傾きがあるように僕には思われるが、事実はわりに平凡で、わかりきっていることを、一つも二つもひねくってみないと、面白くないように思っている人が多いのではないかと思える。僕は万事まず在りのままにみて、その上で千変万化するにしても、それには、それだけの法則があって、むやみやたらに変化するものとは思っていない。在りのままにみずに、ひねくってみだしたらきりがなく、拠りどころをまるで失ってしまうことになると思う。

一番わかりやすい道を通らずに、一番ひねくれた道を通るのが、何か深刻なことのように思っている人があるように思われるが、僕は在りのままにみることが、一番深い生命の源に従順な観方であって、ひねくれたものの観方は、深い真実に到達するのには不適当な道だと思う。

僕は、自然のいろいろのものをみて、かれらは在りのままに生きているからこそ、そこに深い真実がうかがわれるので、もしかれらが、いつも在りのままの姿で自分をみせていなかったら、深い真実はかえって示されないことになる。たとえば星の運行の如きは、数学的に正確に動いていて、非常に簡単といえば簡単である。しかし、だからといって、それが単純で無意味だとは思わない。むしろ、あのように正確に星を運行させる無限の力に驚嘆するのが事実であると思う。人間も、一番人間らしく在りのままに自分を活かすことができたら、その人は一番率直に、素直に自分を活かした人と思う。人間として、一番悟った人は、在りのままに自分を活かして、退屈することなく、そのままで生きる意味を活かすことができる人で、在りのままでない道を歩かなければ人間が救われないものであるならば、人間の創られかたのほうにあやまりがあることになるが、僕はそうであるとは思わない。人間は在りのままに正直に生きることができればそれでよいのである。しかしまだ人

間は、賢さがたりず、在りのままに自分を活かしきれないところに、迷いがあり、また肉体的には病気になり易く、精神的には拠りどころのない生活をすることになるのだと思っている。

在りのままに生活するということは、どういうことかということについては、次に考えてみたいと思っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com